

「あめ」とも「おお」ともつかない声がして見やると、居間で父が額に手を当てて嘆いている。小学生になりたての弟の「算数セツト」。その中の小さなおはじきのひとつに、父は名前を記入してやっていたのだ。近付いて私は笑い転げた。「たけお」と父自身の名前が書かれたおはじきの山があつた。からだ。もう、四十年前のことだ。

父は遠筆だった。私は新しい教科書がくると、高校生には、てもまだ父に名前を書いてもらっていた。どうせ折り皺や書き込みで汚れる教科書も、真、新はうちに美しい文字で名前が入るのは、気分がいいものだ。た。そうして甘えることが私の親孝行であつた。父を出産後、すぐに亡くなつた祖母。母親も知らず育つた無口な父に、私は勝手に同情を抱いていた。「字が上手なんだから書いて頼む時には、祖母の代わりに褒めるよな気が持ちてもいた。「あめ、いいよ」父はいつも嫌な顔もせが、すぐに引き受けてくれた。

そんな父も十四年前、胃癌のため、六十四歳でこの世を去った。実家で父の抽斗を整理していった時、陸軍と印のある罫線用紙が二枚出てきた。一枚は昭和二十七年五月、父が十八歳の時。「読売新聞編集手帖より」とある。気に入った記事と父が書き写したものだ。世界の言語とコミュニケーションについてだった。もう一枚は昭和二十九年八月、二十歳の夏のものだ。「食うに米あり、住むに家あり。……」で始まり「崇高なるものを求め清純な愛を求める者こそ幸福である」と結ばれていた。武者小路実篤の「幸福者」の写しだ。その二枚を前に、私はしばし絶句した。少し丸みを帯びた優しい文字。どんなに努力しようとも、大学生だった父に、中年になつた私は到底敵わない。

時を越えて残る手書きの温もり。古びた罫線用紙と時おりなめらかな青春時代の父に問いかける。「何を思つていたの？ 夢見ていたの？」娘のようにな。母のようにな。